

# 王 経 塚

1 9 7 4

茅野市教育委員会

# 王 経 塚

1 9 7 4

茅野市教育委員会



## 序

諫訪地方の古墳は名の知られているものだけでも百を越えていて、その二分の一以上を茅野市が占めている。とくに王経塚のある塙原は地名が示すように、多数の古墳が造られたところである。

この王経塚は諫訪の古墳のうちでも、下源訪町の青塚、岡谷市長地のコウモリ塚・スクモ塚、諫訪市湖南の双子塚等とともに、当諫訪地方の代表的な古墳である。

茅野市教育委員会では、この王経塚の傍に都市計画道路が開設されるのを機会に、墳丘の崩廻しつつあり破壊の恐れのあることを防ぐため、学術調査を実施し、さらに積極的に復原保存して、郷土を開拓した祖先の墳墓を顕彰することにした。

そこで教育委員会では、大正大学教授斎藤忠博士を団長とする調査委員会を結成し、当地方の権威者宮坂光昭・河西清光の両氏を調査員に委嘱して、調査研究を進めた。

予備調査を昭和49年3月より始め、発掘調査を同年4月26日から5月2日までの7日間に、復原作業を5月14日より7月10日まで行い、すべてを4ヵ月間で完了した。

この発掘調査研究が、学術的に評価されるものとなり、約1300年前の王経塚が完全に復原保存され次代に伝えることの出来ることは、団長斎藤先生の連日に亘る陣頭指揮と宮坂・河西両調査員の精魂こめた指導によるものであり、ここに改めて敬意と感謝を申し上げる次第である。

なお、この報告書は宮坂光昭氏が執筆し、当委員会の宮坂虎次君が協力をいたした。また、まとめを斎藤先生が総括してくださったことは望外の幸で、唯々感激するばかりである。

この事業が、順調に進歩したのは、原田茅野市長殿の格別なるご理解によるものであり、さらに地主の方々のご協力とご尽力いただいた関係者に心から御礼を申して、序文としたい。

昭和50年3月

茅野市教育長 木川千 年

## 目 次

### 序

1. 発掘に至る経過	4
2. 立地と環境	4
3. 墳丘	6
4. 発掘の状況	8
5. 石室	10
6. 副葬品	12
7. 考察	20
8. 古墳の復原保存	22
おわりに	28

## 挿 図 目 次

- 第1図 王経塚付近図(5万分の1)
- 第2図 王経塚古墳地形図およびトレンチ
- 第3図 墳丘図
- 第4図 トレンチ図
- 第5図 石室図
- 第6図 副葬品出土地点図
- 第7図 副葬品実測図
- 第8図 副葬品実測図
- 第9図 副葬品実測図
- 第10図 供養歌入式
- 第11図 昭和24年の王経塚

and the child's language learning. This study is an attempt to examine the relationship between the parents' culture and their children's language learning.

The first section of the paper will describe the research design and the data collection process. The second section will present the results of the study. The third section will discuss the findings and the implications of the results.

**2. Research Design and Data Collection**

The research design used in this study is a case study. The data collection process involved interviews with the parents and observations of the children's language learning.

**3. Results**

The results of the study show that the parents' culture has a significant influence on the children's language learning.

**4. Discussion**

The findings of this study suggest that the parents' culture is an important factor in the children's language learning.

**5. Conclusion**

The results of this study indicate that the parents' culture has a significant influence on the children's language learning.

**6. References**

1. *Chomsky, N. (1965). *Aspects of the Theory of Language*. Cambridge, MA: MIT Press.*

2. *Cruttenden, A. (1997). *Practical Phonetics and Phonology*. London: Edward Arnold.*

3. *Ferguson, C. (1979). *Language, Culture, and Communication*. London: Tavistock.*

4. *Gass, S., & Seligman, C. (1994). *Principles of Language Learning and Teaching*. London: Longman.*

5. *Hymes, D. (1974). *Anthropological Models in Language Theory*. The Hague: Mouton.*

## 1. 発掘に至る経過

茅野市文化財審議委員会において、王経塚の発掘調査および指定のことが最初に審議されたのは、昭和47年5月のことである。これは、古墳の傍を都市計画道路が開設されることになったのが直接のきっかけではあるが、一方、墳丘の崩壊が進み、天井石も露頭して、その状態から後世の人為的な破壊も加わっていることが判明した。このまま放置すれば、道路開通後は、交通量の増加により更に崩壊の度が進み、学問的な損失であるばかりでなく、復原保存も不可能となるおそれがあったためである。

従来、未発掘と伝えられていた王経塚は、姥塚・大塚と共に上川氾濫原に構築された古墳として知られていた。そして、姥塚・大塚は中央線の開通や、道路の拡張工事により、すでに明治時代に充分な調査を加えることもなく破壊消滅してしまった。今日残された王経塚について、学術調査を実施して、積極的な保存対策を樹立し、文化財としての保護活用を図るとともに、郷土を開拓した遠い祖先の墓地として顕彰保存することは、文化財保護行政の上から当然の処置と言ふことができよう。

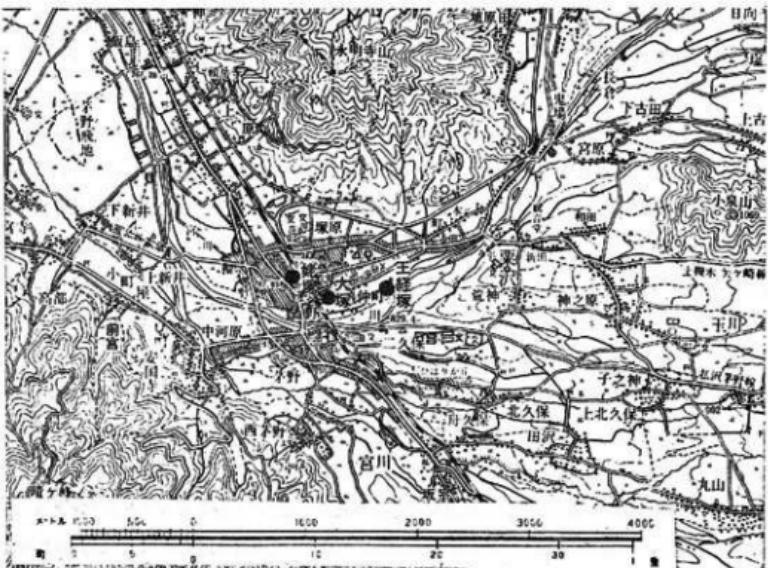
のことから、昭和48年度の文化財保護費の当初予算に、王経塚調査費として209,000円を計上し、更に復原保存のための周囲の土地買収等を補正計上し、総額1,138,000円の予算で事業を実施した。

調査は、我が国古墳研究の第一人者である、大正大学教授斎藤忠先生を団長に、諒訪考古学研究所宮坂光昭、河西清光両氏を調査員に、大正大学生大矢昌彦、黒沢彰哉両君を助手としてお願いし、昭和49年4月26日から5月2日まで発掘作業を実施した。地方の古墳に真摯なる学問的情熱をもって、連日土にまみれて作業、測量にあたられた斎藤先生をはじめ、宮坂、河西両先生、大矢、黒沢の両君に心から感謝申上げるとともに、作業に参加協力された下記の方々に厚くお礼申し上げる次第である。（宮坂虎次）

矢崎弥太郎 矢崎孟伯 柳平政治 矢崎栄一郎 藤森和助 田中文六 両角きよえ 鶴飼幸雄 斎  
森明 田村和幸 橋口清美 藤森泰秋 茅野高校地歴部 北原石材店

## 2. 立地と環境

王経塚は現在の上川河床から、僅か50m北に離れた地点に位置する。蓼科・八ヶ岳天狗岳に発した諸流は合して上川となり、更に霧ヶ峯南縁の小渓流を集めつつ、古墳東方約1500mで、八ヶ岳



第1図 王経塚付近図

美濃戸山中の火口瀬を水源とする柳川と合して西流し、この地永明寺山塊の南麓に、氾濫と堆積の繰返しによる扇状沖積地を形成した。そして更に西に流れて、国道20号線を過ぎると、漸次北に迂回して諏訪湖に注ぎ、沖積平野を形成する。

さて、この一帯は古くから塚原と呼ばれ、肥沃で、地理的にも八ヶ岳四山麓の要に位置する重要な地でもあった。永明寺山裾から横内にかけては、しばしば住居址や、弥生式土器・土師器・須恵器等が発見されるところから、諏訪地方としても早くから農耕を営む集落が形成された地域ということができよう。

また塚原の地名が示すように、多数の古墳が構築された地域でもあるが、現在はその大部分が失なわれてしまった。塚原はその後も歴史上から見ても由緒のある地で、諏訪大社上社とのゆかりが深い。即ち、古墳の西600mには犬射原社が、更に西300mには大年神社が位置する。また東北方1300mには御座石神社が祀られている。三社共に上社の重要な末社で、古式祭事の行なわれた神聖の地とされ、御座石神社の「どぶろく祭」は今に伝わる神事として特に著名で、古式の姿を止めている。

さて、古墳のある地は標高 801m を示し、永明寺山裾から上川河床にかけて緩傾斜する。古墳は上川を隔てて、北側が上川に浸食されて断崖をなす標高 829m の長峯丘陵に対している。

その周辺の古墳は、永明寺山中腹から裾にかけて分布した古墳群、王経塚を含む上川氾濫原の古墳群、および、長峯丘陵の突端に構築された古墳群の三群に分けられる。それぞれ立地が異なると共に、構築年代、性格に若干の相違がある。

上川氾濫原の古墳のうち、姥塚・大塚は明治年間に消滅しているが、これを源訪史第一巻によつてみると次の通りである。

大塚（王塚ともいわれた）は王経塚の西 650m に位置する。明治 24 年に道路拡張の際に地元の住民の手により掘られた。積石塚に属するものであったらしい。石塊をもって側壁を穹状に積み石室を構築し、天井石は三枚であった。規模は長さ 4 間、幅 5 尺、高さ 10 尺とある。出土品は直刀 5、直刀身付属装具 9、勾玉 19、管玉 3、切子玉 29、丸玉および小玉 68、金銀環 10 数箇、鐵鏃約 10 本以上、銅鏡 1 例分、馬具、釘、土師器、須恵器等極めて豊富である。

姥塚は大塚より北に寄り、王経塚から約 850m 離れた、現在の茅野駅広場にあった。明治 27 年中央線開通と共に削平された。副葬品は鉄簪、鐵鏃、直刀、馬具、金環、土師器が記録されている。現在地元原林野利用共同組合に所蔵されているが、これらが全部現存するかどうかは詳らかでない。

この一帯には三古墳の他に、犬射原付近にもあったと伝えられるが、現在は王経塚を残すのみとなつた。（宮坂虎次）

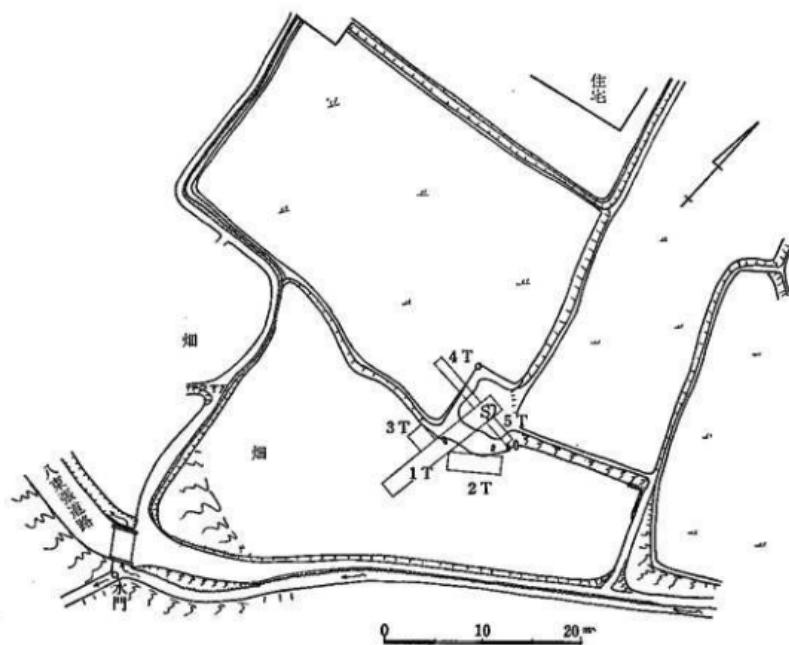
### 3. 墳丘

王経塚古墳の発掘調査前の状況は、北側の水田が、墳丘の 1/3 位を埋めつくし、墳頂と大体同じ高さになっている。西側も水田であるが、東側水田より約 1 メートル低く、これも墳丘の裾をかなり削っている。東南部が畑であつて、もっとも低いが、石室底より約 50 センチ低い。その東南方の先には、上川の河床で約 50 メートルで達する。地形は北方の永明寺山塊の裾から、上川河床へ漸次勾配があるが、そのもっとも上川に近い、低くなつた場所に築造された古墳である。

墳丘は以上の状況からして、北方よりみると、わずかな頂部と、天井石の削られたものがみえるだけで、注意しないと気づかないものである。東南からみれば、墳丘の形が、西側にはっきり出ており、さらに天井石の削れたもの、露出したものが頂部辺にあって、古墳と判別できる状況であった。

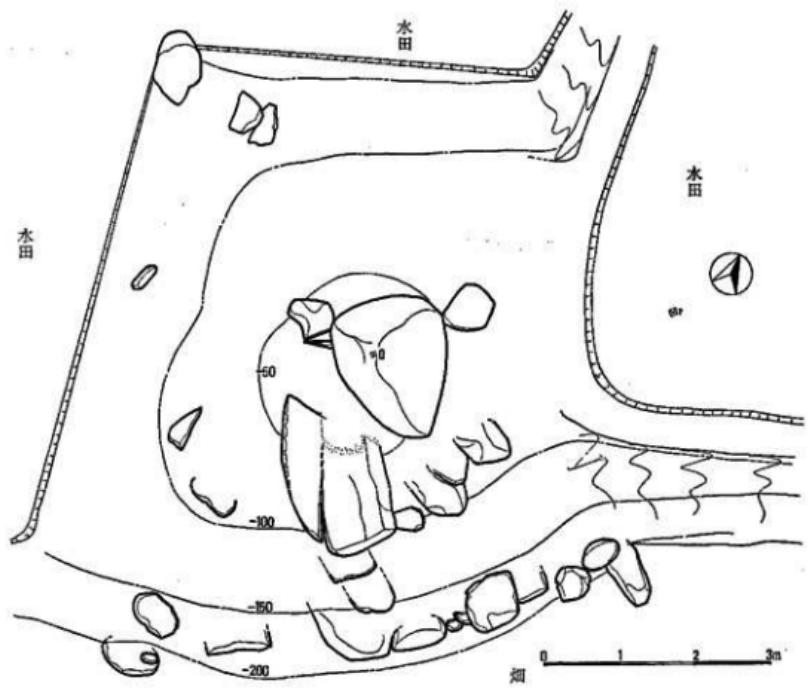
墳丘上部には、露出せる天井石のほかに、側壁石の一部、それに多量のこぶし大の円礫（安山岩、硬砂岩が多く、縄文時代の凹石とよく似ている）が、散布していた。この小円礫は、4トレンチ C-C' でみると、石室の側壁周囲の裏ヅメ石として、それも石室の上半部のみの裏ヅメ石として用いている。これはいわゆる土石混合墳という形式に属するものといえよう。この小円礫は上川河原に大量に堆積しているが、これを運んで利用したものであろう。

墳丘の築造はかなり入念な構策をみせており、すなわち石室の外周に、二列にわたる外護列石といへる、長円形の枕形をした石を配列し、（2トレンチ、4トレンチ図）その列石状の内帶列の上段に



第2図 王経塚古墳地形図およびトレンチ

は、小円礫を裏ヅメとして積みこんでいる。この二列の外護列石列は墳丘中に入っているが、現状の墳丘外表面の、東南側の裾部分に、列石状に土止メ石が押しつけられているが、これも外護列石列の一番外帯のものが墳丘外に露出してしまったものとみると、墳丘内には、石室を巡って、三帯の外護



第3図 墳丘図

列石列の存在があって、石室および、墳丘の盛土の保護をしていたものといえよう。

墳丘の規模は直徑 12.30m。高さ 2.50~3.00m の円墳であるが、築造時はこれよりも稍大きかったと考えてさしつかえない。(宮坂光昭)

#### 4. 発掘の状況

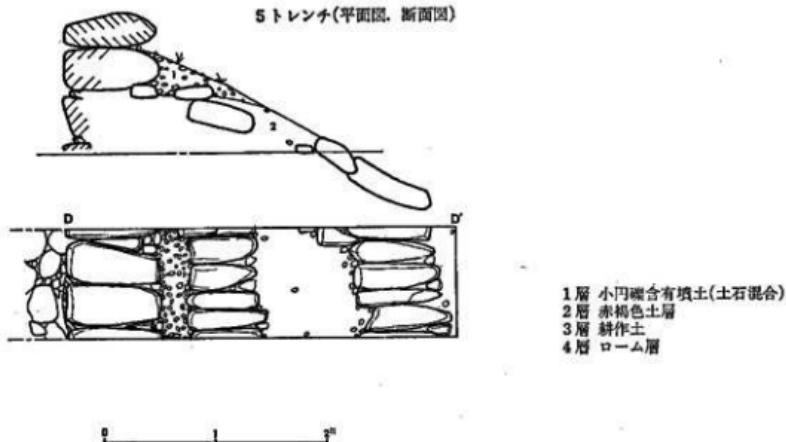
墳丘の発掘については、石室入口を南方にあると推定して、墳丘の南面と、前庭部である墳丘裾の南に、南北に 8 メートル、幅 2 メートルの 1 トレンチを設定する。さらに墳丘の裾を巡るように、2 トレンチを北東に、またそれと反対に、西方へ 3 トレンチを設定し、これらのトレンチで、前庭部で

の墓前祭と、周溝の存在を確認するためのものである。

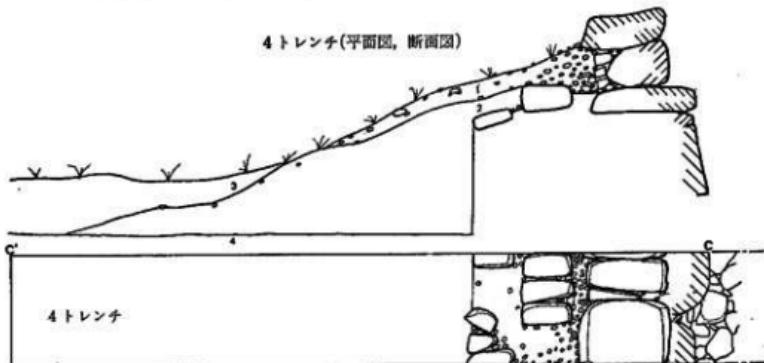
一方墳丘の墳上からのトレンチを設け、墳丘構築状況を把握すべく、石室に直交するように西方へ4トレンチを、東方に5トレンチを設定して、順次発掘を進める事とする。また最後に、石室内の下底部敷石の下における地層を調査するため、石室北端隅に6トレンチとして、1メートル四方の試掘坑を設けた。

1トレンチの結果は、羨道西壁端より南方1メートル辺に、石室底より1メートル低い土中に小円

5トレンチ(平面図、断面図)



4トレンチ(平面図、断面図)



第4図 トレンチ図

跡の集中せる箇所が発見されたが、何であるか不明であった。畑に耕作するとき、墳丘上の小円跡あるいは、石室底の小円跡を、埋設したものとのみ方もある。そのほかには周溝らしきものも、祭事の痕跡も発見できなかった。出土品は小札状鐵板、須恵器破片などである。

2 レンチも 1 レンチ同様に、1 レンチに近い方に、小円跡の埋没がみられた。そのほかは、何等の施設も、出土品もなかった。

3 レンチは、黒土層のみで何もみられない。

4 レンチは墳丘の石室西壁から西方の水田へ伸びる 6 メートルのレンチである。墳丘上の様相は、西壁の横石を置いて、その外周に 20 センチさがって、外護列石が配列されて、囲繞されているらしい。この西壁と 1 列目の外護列石間には、半大の小円跡がぎっしり積み込まれ、また露出している。一列目の外護列石の外帶には、さらに 10~20 センチ離れて、2 列目の外護列石がある。4 レンチでは大分配列の乱れがあるが、これも墳丘を囲繞するものであろう。一列と二列目の列石間には土の積み込みのみで、わずかに小円跡の混入があるが、一列目の崩れ込んだものである。(宮坂光昭)

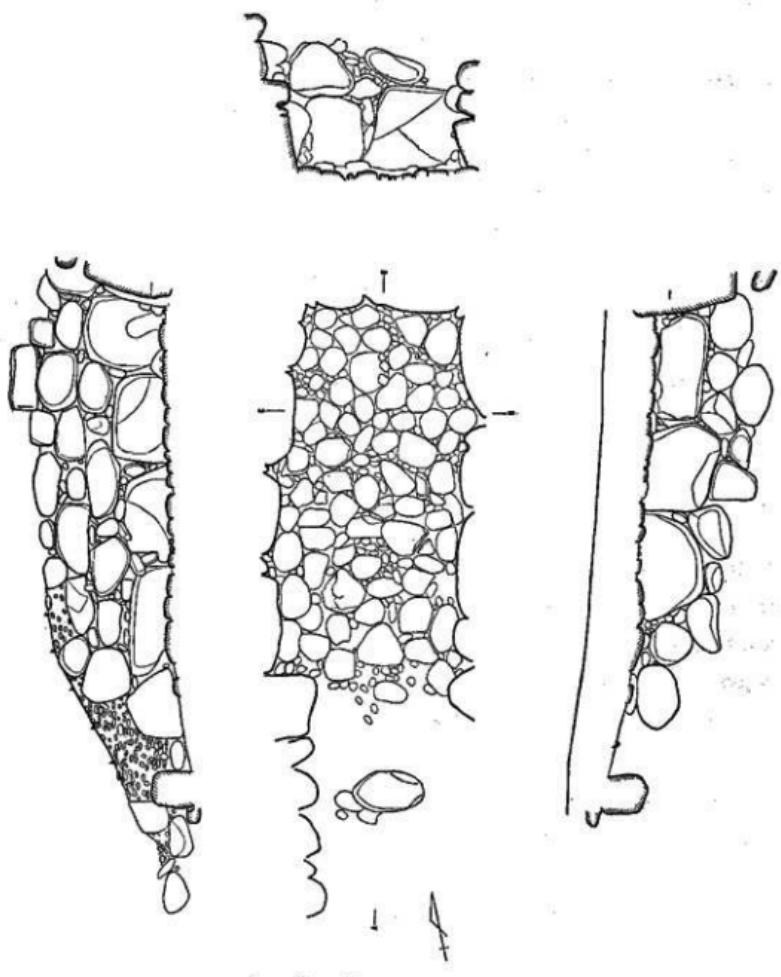
## 5. 石室

発掘された石室は、羨道部の東壁が破壊されており、金石室の上一段ないし二段の石が取去されていた。残存する石材から平面プランをみると、片袖式石室となるだろう。玄室プランは、奥幅より入口幅の方が稍広いが、中腹部にわずかな削張りがみられる。

周壁の石材はいずれも河原疊を用いたもので、ツメ石も河原石である。床面は黒土層(ローム層は -55 センチ下層にある)上に、平らな円跡を敷きつめ、その空隙にも小円跡で充填しており、その敷石層は、中央部をやや窪く造っている。敷石層の上に一つならべ程度に小円跡を敷いているが、その上に木棺を納入したものと観察される。

玄室底は中央辺がやや窪いが、全体的には幾分入口に傾斜をもっている。それにつづく羨道は、かなりの勾配を持って渓門部に下っているが、築造時の設計であるのか、その後の沈下であるかは不明である。ただし、下層に存在するローム層の観察によれば、奥壁の下層のローム層は、石室方向へ 10 メートル延長した部分で、1.20 メートル低くなるという、勾配(15°)を持っている。

石室の計測値は、玄室の長さ 3.77 メートル、奥幅 1.60 メートル、入口幅 1.70 メートル、中央辺の幅は 1.80 メートルとなる。羨道部は長さ 2.50 メートル。その幅 1.35 メートル。石室内の高さは上一段くらいの石が持去されているから、それを推定すると、1.08 ないし 2.00 メートルの高さにな



第5圖 石室圖

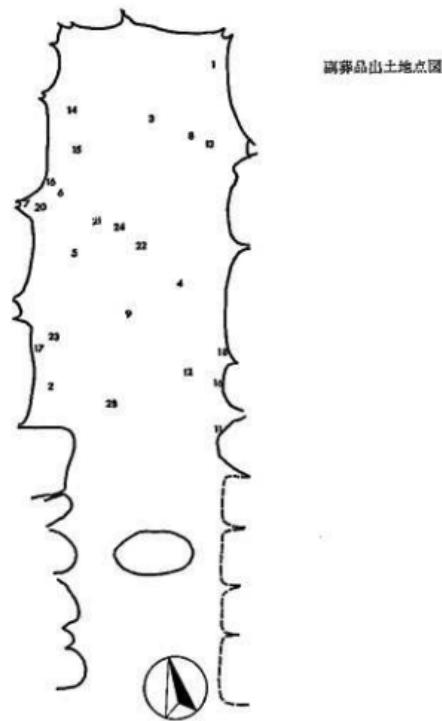
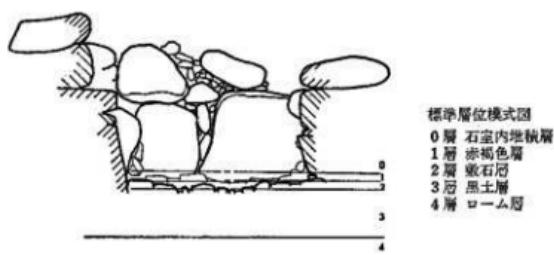
るだろう。(宮坂光昭)

## 6. 副葬品

王経塚古墳の石室内外より発見の副葬品は、その原位置については、盗掘等による搅乱が著しく、原位置を保っているものは、極めて少ないとと思われるが、発見の位置はつとめて記述したい。また石室内出土品の発見せる層位については、概略次のようになる。すなわち最下層は石室底の、人頭大の円蹠を敷いた部分と、その直上に敷いた小円蹠層である。

〔表1〕 王経塚古墳副葬品出土地点一覧

番号	品名	層位	摘要
1	金環	下層	
2	金環	"	
3	土師器片	上層	高台付
4	骨片	"	
5	骨片	"	
6	金環	下層	下層の小円蹠直上。小形
7	鉄鐵	"	数本一括になっている
8	土師器	上層	糸切底の坏。L=-144
9	馬具	下層	綴具小形。小円蹠上
10	鉄鐵	下層	石室入口辺
11	鉄鐵	"	"
12	馬具	"	綴具大形。大円蹠上
13	小刀子	"	切先北西へ向く
14	刀片と锷	"	大円蹠に銹着
15	鉄鐵	"	
16	鉄鐵	"	
17	金環	"	
18	刀子	"	細身の刀子
19	小玉	"	35個以上
20	鉄鐵	"	
21	鉄鐵	"	
22	竹	"	
23	鉄鐵	"	
24	鉄鐵	"	三角形、平根鐵
25	鞘	"	
26	不明鉄片	"	桂甲小札状。第1トレンチ石室前



第6図 調査品出土地点図

この層直上より大多数の副葬品と、人骨片の出土がみられている。この敷石層の上に赤褐色ないし黒土の層が、約8ないし13センチ堆積しており、この層中にはほとんど副葬品等はみられない。この層の直上に木炭や焼土塊と人骨、土師器の环と高台付环（復原で完形）の発見がある。それより上層は流入せる黒土が、石室内に充满している。

**金環**（第7図1~4） いずれも下層の円礫直上の発見である。（1）・（2）と（4）は大きさは大体同じであるが、（3）は細く小形である。いずれも銅地で鍍金されたとみられるが、鍍金は剥離して、緑青のみである。形状は真円ではなく梢円形をなし、その断面も真円ではない。

**丸玉**（第7図5~10） 黒褐色の練玉製の丸玉であるが、玉形は粗雑な作り方であり、大きさもやや不揃いである。貫通孔はほぼ中心に穿たれている。

**小玉** 石室下層の土を箇でふるって発見したもので、35個以上はあったものと考えられる。ガラス製の青色をした、直径3~4ミリ。厚さは2.5~3ミリで、中央に貫通孔がある。大きさは不揃いの小玉である。

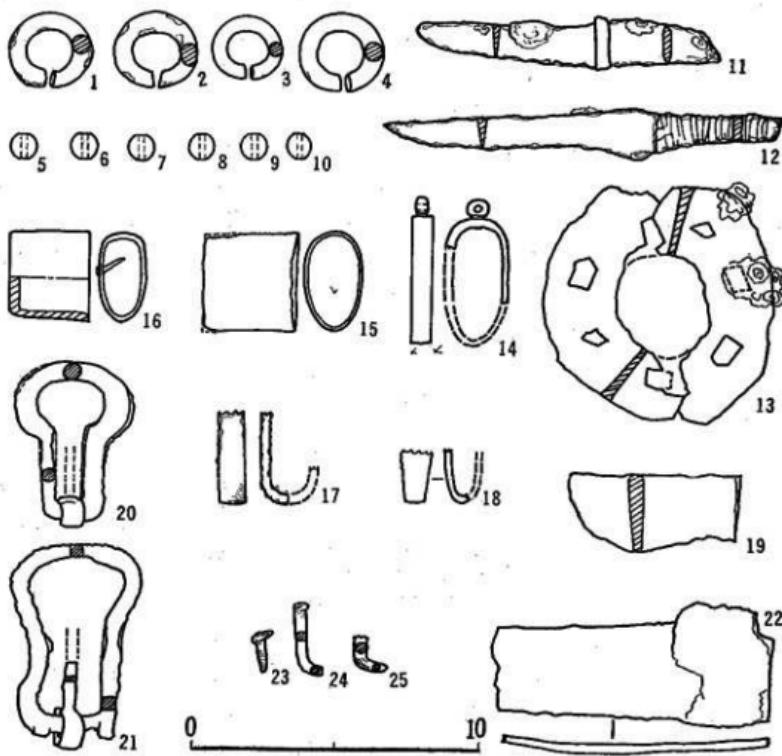
**刀子**（第7図11、12） （11）の方は厚手で武骨な作りの、タナゴ腹の切先で、圓には鞘口金具がついたままである。刀は平様平造りで、茎の作りも粗雑である。（12）は細身の鋭い切先で、刃はよく研磨して磨耗したものである。平様平造りの刀で、茎には柄に巻いた有機物が接着している。いずれも石室下層の発見である。

**直刀と刀装具**（第7図13~19） （13）は鉄製の六窓ないし八窓の倒卵形の锷である。腐蝕が著しく穴洞も容易でない。（14）は吊金具であるが、鉄製で破損している。（15）は薄手鉄板製の鞘金具である。（16）は鞘の小尻であり、内側に釘が出ていて、しっかりした作りのものである。（17）は鞘の資金具であろう。（18）も鞘の吊金具か、資金具の破片と思われる。（19）は直刀の切先部分であろうが、切先の形も藤切先か、ふくら切先か不明のほど、腐蝕が著しい。

これら刀と刀装具のうち、锷と直刀切先部分は、奥に近い西側の、下層円礫直上より発見されたが、他の部分品は、いずれも下層の土を箇作業中に発見されたものである。しかし、（13）から（16）は同一直刀の部品かと考えられる寸法である。したがって、直刀は複数本の副葬品が想定される。

**馬具**（第7図20・21） （20）は馬具の革紐等につく、駁具で、小形の方である。下層の円礫直上発見で、石室入口に近い部分である。（21）は前者より大形であり、形もやや異り、武骨な作りである。発見はやはり下層円礫上で、入口に近い場所である。

**不明鉄器**（第7図22） 小札状の鐵板であるが、一片のみであるため、不明である。石室前の1トレンチよりの発見である。



第7図 王経塚古墳副葬品（金環、刀装具、馬具等）

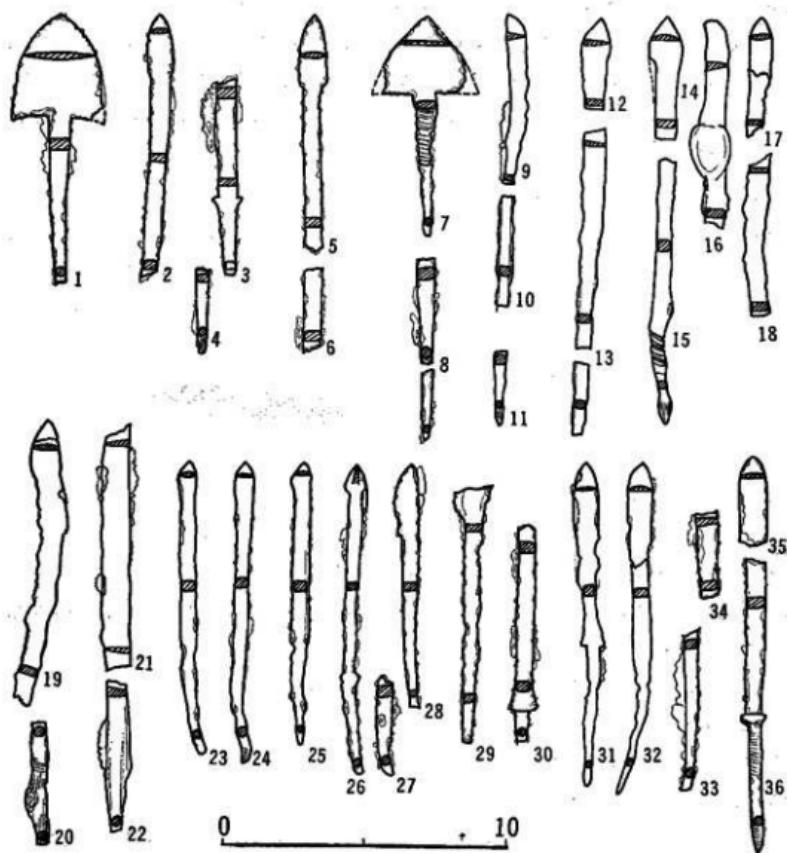
鉄釘（第7図 23~25） 角釘とその尖端であり、木質部のついたものもある。

鉄鎌（第8図） いずれも鉄鎌は石室下層の出土で、円礫の敷石に密着しているもの多かった。

図(1)~(4)は一括して出土したが、(1)は平根鎌で茎（鎌代）が欠損している。三角形の刃部と頭部（鎌被）はあまり長くなく、茅野姥塚古墳出土品中に例がある。(2)は尖根鎌形式の柳葉形鉄鎌であるが、頭部の幅がやや広目で、純重な作りである。(3)は鎌の頭部と茎の部分で、棘状突起が頭と茎の境につくもので、いわゆる棘鎌被鎌形式の部分で、同形式の鉄鎌の存在を示している。(4)は茎部分で、木質部が銹着している。出土地点は15である。

(5)～(8)は出土地点が同一の 23 である。(7)は柳葉形で断面レンズ状の刃をもつ長頸鎌である。  
 (7)は三角形をした形の平根鎌で頭部一杯まで木質がみられるが、鎧代が頭上端までの鎌である。茅野大塚古墳副葬品に例が認められるものである。(6)と(8)は頭部と茎部分である。

(9)～(11)は出土地点 11 で、同一部分かも知れないが、曲折している。刃部は片刃鎌で断面は平棟平造り形式で、直刀の刃部断面とにた形をしている。



第8図 王経塚古墳副葬品(鉄鎌)

(12) と (13) も同一地点 10 の発見であるが、二本の別の鐵だとみられる。すなわち (12) は柳葉形をしているが、刃形は片刃鐵で頭部へ下ると断面は長方形になる。(13) は長頭部分であるが、上方の断面形は、片刃形の残影をみせており、下方では断面方形となっている。

(14) と (15) も同一地点の 20 で発見された。(14) は柳葉形と言うより、フタシの鶴形をした刃部で、頭部になると長方形の断面となる。

(15) は頭部から茎部分で、茎部分の間から下には木質が锈着している。

(16)～(22) は発見部分が不明であるが、(16) は片刃鐵、(17) は柳葉形鐵、(18) は長い頭部分である。(19) は柳葉形鐵で先端欠損しかつ弯曲しているが、長い頭部をもっている。(21) は頭部だろうとみられるが、幅が広目でかつ長く、断面は片刃形をしているから、片刃鐵の頭部だとしてよいだろう。(20) (22) は頭部下方と、茎部で、木質の锈着がある。

出土地点 7 からは束になって(23)～(30) が一括発見されている。いづれも長さは 10～11 センチと揃って、太さも、断面形も、同類の製造法のようで、鋤の方もまったくよくていている。いづれも尖根鐵で(23) (25) (26) は刃先三角形で断面レンズ状、長頭で茎部は少ない。(24) は柳葉形鐵で長頭である。(28) は片刃鐵と觀られるが、鋤で断面不明で頭と茎は他と同様。(29) も刃部先端の欠損で不明確であるが、片刃鐵になるのではなかろうか。頭と茎も他と同様の作り方である。(27) は頭下部と茎部分。(30) は鐵の刃部が欠失したものである。

(31)～(33) は出土地点 16 であるが、いづれも柳葉形鐵で断面はレンズ状の刃部である。

茎と頭の長さは、(31) の方は茎が頭より長いが、(32) は茎は短い。(33) は鐵の下半部である。

(34)～(36) は出土地点 23 である。柳葉形鐵であるが、(35) と (36) が一体のものかどうかは不明である。柳葉形鐵の平均的な長さからすると、別個体のようである。(34) は頭上半部で、片刃鐵の部分のような断面をしている。となると、3 本の別々の鉄鐵であるかも知れない。

須恵器（第 9 図 1～8）　須恵器はいづれも破片のみで、発見地点は石室内堆積土の各所から発見されたり、墓道部、外部もある。

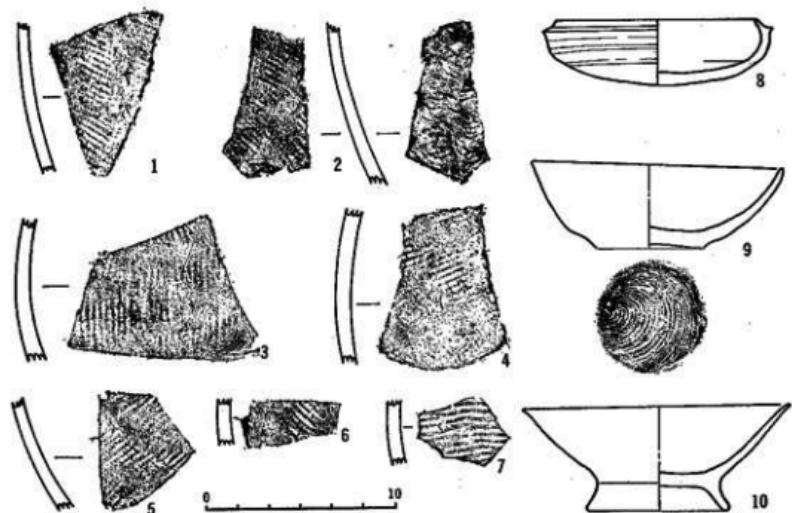
石室前の南方へ作った 1 トレンチからは、(2) (5)～(8)。4 トレンチからは (3)。

石室内上層より (1)。3 トレンチから (4) が発見されている。

須恵器破片の外表面形は、格子目文が (1) (3) (4) (5)。豊目文が (2) (6) (7) となり、他の細片で同一個体とみられるものもある。裏面に同心円あるいは弧文のみえるのは (2) である。色調は表面が黄褐色あるいはねずみ色で、内側はねずみ色が多い。胎土の焼成色は、赤褐色のやや焼きの低温とみられるものは、(2), (4), (8)、であり、他はねずみ色の比較的硬質の焼成である。表面に自

然釉のかかったものは、(4)と、他の蓋の破片にみられた。

土師器（第9図、9、10） (9)は黄褐色の薄手の杯で、内側底面に黒色のスス状のものがついており、外底面には糸切底がみられる。発見点は石室の奥に近い東壁側で、底の円錐面より、約5~8センチ高い上層の発見である。(10)も(9)とよくにた薄手の高台付杯形土師器で、高台部分は石室の奥側で中央の上層から発見された。細かな破片は篩作業により発見されたのを、復元したもの。高台は、糸切底の坏を作って、接着したもので、糸切底が残っている。（宮坂光昭）



第9図 王経塚古墳副葬品（須恵器 1~8、土師器 9、10）

〔表 2〕

古 墳 名 グ ル ープ	古 墳 名	小字名	墳形	内 部 施 設	副 葬 品
上川河床古墳群	1 一の坪古墳(一本松)	横 内	円	不	勾玉
	2 塚ノ越古墳	"	円	無石 柳	
	3 大射原古墳	塚原	円	不 積石	
	4 姉塚古墳	"	円	丁字形石室	玉、直刀、鎌、馬具、土器類他
	5 大塚古墳	"	円	積石 塚	玉、直刀、馬具、金環、土器類他
	6 王経塚古墳	"	円	横穴 積石	玉、刀、馬具、金環、土器他

摘要 ループ	古 墳 名	小字名	墳形	内部施設	副葬品
長蜂古墳群	7 四ツ塚 A	茅野	円	積石方形石室	玉, 刀, 鐵, 金環, 土器他
	" B	"	円	石室	玉, 金環, 刀, 馬具
	" C	"	円	石室	金環
	" D	"	円	石室	玉, 金環, 刀
	8 上ノ山古墳	"	円	無石室	金銅馬具
	9 金古墳	"	円	無石室	玉, 金環, 刀, 土師
	10 雨降古墳	坂室	円	無石室	玉
	11 田沢古墳	田沢	円	無石室	玉, 鐵, 馬具
	12 河久保古墳	荒神	円	横穴, 混室	玉
	13 下ノ原1号古墳	"	円	石室	
	14 下ノ原2号古墳	"	円	"	
	15 中ヤツカ古墳	矢ヶ崎	円	不	須恵
	16 の腰古墳	"	円	"	
永明寺山古墳群	17 西林校	"	横	穴?	直刀
	18 植ノ塚	"	横	穴	直刀
	19 中矢穴1	"	"	"	鐵鍼, 須恵
	20 中矢穴2	"	"	"	
	21 西入古墳	1	"	"	
	22 西入古墳	2	"	"	
	23 西入古墳	3	"	"	
	24 矢穴古墳	1	"	"	
	25 矢穴古墳	2	"	"	
	26 矢穴古墳	3	"	"	
	27 泽口古墳	原	横	穴	玉, 金環, 直刀, 鐵, 銀
	28 ギンザラザウス古墳	"	"	"	須恵臺(伝承)
	29 一本横古墳	"	"	"	玉, 金環, 武器, 馬具
古墳群	30 築石古墳	古	横穴兩	柄	玉, 金環, 鋸太刀, 馬具他
	31 武将塚	古	横	穴	金環, 直刀, 鐵, 須恵, 土師
	32 藤二坊薬師古墳	古	横	不	富士講祭壇か
	33 十二坊薬師古墳	古	"	"	
	34 上原矢穴1	1	"	"	
	35 上原矢穴2	2	"	"	
	36 上原矢穴3	3	"	"	
	37 上原矢穴4	4	"	"	
	38 神戸矢穴	神戸	"	"	須恵
	39 矢穴(ホーソノ神塚)	"	"	"	須恵

## 7. 考 察

王経塚古墳の立地は、塚原のもっとも東南のはずれで、上川に接する八束張に築造されている。発掘して石室を確認するまでは、古墳名である、時代の下った経塚ではないかとする考えもあった。それはあまり上川河畔であって、上川の氾濫をこうむる虞があるからの考え方であった。結果からすると、河原の大きい礫を用いた、片袖の横穴式古墳であって、王経塚古墳築造後は、上川の氾濫はなかったようであり、上川の河床が安定したのをみて、築造したものであろう。

墳丘は当地方としては中位の円墳で、石室構造が、例の少ない片袖式横穴古墳である。

諏訪地方後期の古墳の石室変遷を概観すると、巨石を用い、羨道を有した両袖式古墳が、羨道を無くして単なる長方形石室になる事が知られるが、その変化の過程の中で、両袖式の石室が<sup>12</sup> 片袖式石室、あるいは羽子板形の石室にと変り、漸次、袖部分と羨道部を省略していく事が考えられる。そうみると、七世紀代前半とされる茅野市釜石古墳は両袖式石室で、巨石を用いた石室であり、茅野市大塚古墳は、長方形の玄室のみの古墳で七世紀末と考えられている。また七世紀末と考えられる例として、岡谷市今井長者藏古墳<sup>13</sup> があるが、これも長方形の小形玄室のみの古墳であり、終末期古墳は、その石室は単に、木棺あるいは遺体を包む程度の小さい石室となるのである。このような姿相をみると、王経塚古墳は、その両形式の中間の、いわゆる袖部分が、羨道を失う中間過程と考えてもよいだろう。また胸張りの傾向が認められるのも、その時期を示すものだろう。

副葬品からの時期判定は、量が少なくて不明確といわざるを得ない。終末期古墳に通有的にみられる玉、金環、馬具が発見され、また比較的量の多かった鐵鍼は、二例の平根鍼を除くと、片刃鍼、三角鍼、柳葉形鍼は長頭鍼で、当地方の七世紀代末の古墳に多く認められるものである。須恵器破片は、いづれも焼成が軟かいもので、当地方の古墳時代では後半のものであろう。なお土器器二点については、平安期に属するものと考えられるが、この時期に、諏訪の古墳には、追葬が多くなされたらしく、同時期の遺物が<sup>14</sup> よく認められている。以上のように、石室形態および、副葬品からして、七世紀代の後半に位置する古墳であろうと考えられる古墳である。

茅野市における古墳群のなかの、王経塚古墳について考えてみたい。茅野市の古墳数は諏訪郡の古墳総数130余基のうち、約半数を占める。しかし古墳をその扱るべき地形、立地によってグルーピングすると、茅野市の上川、宮川以東の地を、湖盆東縁古墳群と大別することができる<sup>15</sup>。それは字名でいうと北から上原、横内、塚原、矢ヶ崎、茅野、坂室、それに荒神を含括する地区である。

この湖盆東縁古墳群は、さらに立地によって、次のように群別できる。すなわち、永明寺山麓に占めるグループと、上川河床に立地する古墳群。そして上川を越えて東南にある長峰丘陵の先端にある古墳群になる。このうち先行する古墳の存在するのは、永明寺山麓古墳群の七世紀前半の釜石古墳<sup>1)</sup>それに矢穴三号墳等<sup>2)</sup>がみられる。この永明寺山麓古墳群は上原、塚原、矢ヶ崎と広い地区にわたり、さまざまな山ひだをもって、広い山麓をかかえている。それらは終末期古墳になると、氏族単位の小集団と深いつながりをもつ古墳となるが、小さい立地毎に小氏族の墳地化する事が考えられる。さらに細かい群別が可能であろう。

長峰古墳群は荒神と茅野にかけてのグループで、特に長峰先端に築造されている群集墳傾向をみせる、四ツ塚、金鍔塚、上ノ山古墳は、諏訪地方の終始期（最末）古墳の様相をみせる代表的な古墳であって<sup>3)</sup>、飾馬具を副葬するも、小埴土をもつが、石櫛というべきもない。単なる配石をもつもの、あるいは無石櫛墳となって、古墳時代の最末に生じた地区である。

上川河床古墳群は、現在の茅野市の市街地になるが、矢ヶ崎と塚原の一部で、上川河床の形成した氾濫原上になり、現上川は東南方の長峰丘陵直下を、安定して流れている。この古墳群は比較的早く破壊されたが、多くの人の注視を引き、記録がよく残されている古墳が多い。大塚古墳<sup>4)</sup>は積石塚形式で、良好な馬具と、多量の玉類が残され、銅鏡も注目される副葬品である。姥塚古墳は丁字形石室をもつ変形古墳で、石室や副葬品からみて奈良時代（八世紀）へ降る古墳とみている。また平安期の追葬品とみられるものがあって、ことに瑞花双鳳八稜鏡と葡萄唐草文鏡は注目されるものである。

以上三群の古墳群は、湖盆東縁における古墳の生起からみると、永明寺山麓古墳群にまず7世紀前半の釜石古墳が築造されている。そしてこの永明寺山麓古墳群に引きづき出現する古墳は、矢穴古墳と俗称されるように、小埴土、小形横穴式石室、直刀、鐵鎌という武器の副葬が多く認められ、武人的性格をうかがわせる。古墳の主の姿がうかんでくる。

先行する古墳築造の山麓を北にのぞんだ上川河床上において、古墳が造られたのは、まずこの王経塚古墳ではないだろうか。この古墳群は、上川の厚い堆積層上に造られているので、基礎の石はローム層には達せず、黒土層上に据えられている。王経塚古墳、大塚古墳、姥塚古墳、犬射原古墳と共に共通する点は、積石塚形式。石材は河原石。副葬品に馬具が多い。平安期頃まで後裔に奉祭されているらしく、追葬品がみられる等であり、その性格は、馬匹関係的、帰化人の性格が<sup>5)</sup>うかがえる。そしてこの古墳群は、八ヶ岳の山裾をまわって、佐久へ通じ、さらに東方の上野国に通ずる。のちの東山道の道筋にあたり、そのネックを押えた場所になる。またのちの大塚の牧は、この地区的上手の

八ヶ岳西麓に比定されるもので、いま直にこの牧との関連を首肯すべきではないが、官牧に指定され得べき、前段の素地が存在していたとの考えもできよう。そうした馬匹関係者、帰化人的要素を含んだ集団が、上川河床の安定した地に占拠をはじめた事がうかがえる。

上川を越えた長峰丘陵先端の古墳群は、前二群よりも後出するものである。古墳期の最末と考えるべき、木棺の周囲に配石を置く程度の、あるいは無石構造というものの、その副葬品は飾馬具と、武器が目立つ。この長峰丘陵は南山浦という、八ヶ岳南麓よりの道が下ってくるもので、その道が平地に達する位置に築造された古墳群である。南山浦にはやはりのもの官牧である山麓の牧の地が推定されており、馬匹と武器の関連。それに茅野氏という古氏族の関係から、武人的性格をもつ背後集団が想定されるのである。

王経塚古墳の発掘調査、そして保存作業をなすにあたり、諏訪郡でもっとも古墳の密集地帯である、茅野市の古墳について、分析と考察を行なってみたが、試論であるので、今後一層の検討を試みたい。(宮坂光昭)

- 注 1 宮坂光昭、諏訪湖盆東縁の終末期古墳群の考察、信濃 22—4
- 2 宮坂光昭、諏訪盆地湖北における古墳発達の一試案、信濃 20—4
- 3 中村竜雄、宮坂光昭、岡谷市上ノ原遺跡の調査、パンフレット
- 4 桐原健、諏訪地方古墳群にみられる一姿相、信濃 16—10
- 5 相原健、諏訪盆地にみられる終末期古墳の様相、長野県考古学会誌 7
- 6 宮坂光昭、諏訪市豊田小丸山古墳について、長野県考古学会誌 21
- 7 宮坂光昭、細川华人氏昭和4年発掘せるもの。「旧永明村誌」において採録してあり、未完
- 8 宮坂光昭、地方における古墳時代末期墓制の展開、信濃 25—4
- 9 宮坂光昭、茅野市大塚古墳について、長野県考古学会誌 7
- 10 斎藤忠、大場勢雄、一志茂樹他、積石塚をめぐる諸問題、長野県考古学会誌 6

## 8. 古墳の復原保存

王経塚の発掘は、茅野市文化財保護行政の一環としての、保存を目的とした学術調査のため、その復原にも心を砕いた。しかし、過去において、天井石の一部を持ち去られ、石室の積石も上部を欠陥する等人为的な破壊が加えられていたため、原状どおりの復原というわけにはいかなかったが、発掘調査の結果判明した当初の古墳の規模・形態に、できるだけ近づけるべく努力した。

王経塚は從来未発掘古墳と伝えられていた。しかし、当地方他古墳と同様に盗掘が行なわれたもの

であろう。天井石は少くとも、玄室部においては三個の花崗岩磐石を使用したものと思われるが一個を欠除していた。奥壁にかかるもの一個は、ずれて石室の上に露頭し、一個は二つに割られて、側壁上に半分が、封土中に半分が遺存していた。奥壁は下段の磐石二個は原状のままであったが、上部に載る石のうち右端のものが欠除していた。石室の左側壁は、ほぼ元の形態を止めていたが、右側壁は下から三段目四段目が欠除していた。運び去られたものもあり、石室堆土中や封土中に転落埋没したものもあった。これらはすべて復原に使用した。

天井石は永明寺山の花崗岩を用いているので、たまたま公園基地開発工事中の永明寺山の、山腹より掘り出された石を選定した。しかし適当なものが見当らず、最後に永明寺山古墳群の石材と推定されるものを、地元の塚原区から譲り受けた。

石室の石積みは、上川河床の河原石を使用しているので、古墳の南を流れる上川から、かなり多量の石を運搬し、不足を補った。

さて、復原に際しては、次の諸点に特に留意した。

古墳の周囲に石室とほぼ同じ高さに水田があるため、耕作期には石室内に水が滲透し、冬期には、寒冷の気候のため、毎年の凍結の繰返しにより、長い間には石室崩壊のおそれが充分考えられるので、石積の間隙の土を洗い取り、コンクリートを詰めて補強した。

天井石は割られたものを使用するので、側壁からはずれ落ちる危険があり、ためにH鋼を両側壁に渡して、その上に載せた。

道路に接する墳丘南東側は、将来の交通量の増加による崩壊を防止するため、止むなく、上川の河原石を積み、コンクリートで補強した。

漢道部は残存する片袖の石のみとして復原は行なわず、玄室入口に鉄扉をつけて、内部の状態が観察できるようにした。

石室床面は全くもとの状態のままである。

墳丘は、周囲の土地所有者の理解により、周囲  $36.805\text{ m}^2$  を買収して据を拡げることができた。そして周囲に通路を設けて、古墳を一周することができるようとした。

墳丘の封土は、崩落して低くなっていたため、古墳の南の道路用地の上を利用し、最後に、土地の自然環境と合地させるため、上川河原の自然芝により芝張りを行なった。

復原は5月14日に開始されたが、種々の都合から断続的に作業が行なわれ、最終的に完成したのは7月10日である。

8月12日、原田茅野市長をはじめとして、関係者一同の参列を得て、復原供養祭が挙行された。

おわりに、王経塚古墳復原のために、快く土地を提供してくださった小平政敏、田中光昭両氏にお礼申し上げるとともに、復原作業に参加ご協力いただいた方々に心から感謝申し上げる次第である。

(発掘および復原日誌)

3月7, 8, 9日

宮坂光昭氏王経塚の墳形測量を行なう。

3月13日(水)

茅野市文化財審議委員会を開催し、調査に大正大学斎藤忠先生をお願いすることに決まる。

3月15日(金)

尖石考古館長、東京に斎藤先生の自宅を訪問し、王経塚発掘について、先生のご協力のご快諾を得ることができた。

3月31日(日)

斎藤先生11時40分の特急にて来市。直ちに王経塚を踏査し、その後市役所にて今後の発掘計画の打ち合わせを行なう。

4月1日(月)

斎藤先生奥藤科に一泊のあと帰京される。

4月25日(木)

斎藤先生、大矢、黒沢両君とともに10時45分茅野駅着。午後1時30分より王経塚現場において茅野市長はじめ関係者21名参列のもとに慰靈祭および鍵入式を挙行する。式終了後発掘器材の運搬をする。



挿図10 供養鍵入式

4月26日(金) 13名

墳丘頂部の土石を除去し、チェーンブロックにて天井石を撤去する。墳丘南側にトレッジを設定して地層の状態を調査。

4月27日(土) 13名

石室の内部の堆土を掘り下げ、底部より遺物が検出される。細川先生他5名の方が見学される。御座石神社に市指定無形文化財「どぶろく祭」があり、午後斎藤先生も見学される。

4月 28日（日） 20名

日曜日のため高校生の参加者多し。石室の底部を清掃し、更に墳丘西側に構造解明のためのトレンチを設定する。南側のトレンチを拡張して墳丘のひらがりと構造を調べる。

4月 29日（月）

雨のため発掘を中止する。斎藤先生は尖石考古館にて資料撮影。

4月 30日（火） 9名

石室内の清掃と測量。墳丘西の水田に地主の諒解を得てトレンチを設定し、古墳の当初の規模の解明に努める。

5月 1日（水） 9名

午前10時より現場において王経塚調査委員会を開催し、斎藤先生の経過説明を受ける。午後は測量と墳丘構造の解明に力を入れる。

5月 2日（木） 9名

石室内部を清掃。午前10時各新聞社に発掘経過報告。後道入口下層の構造調査。トレンチを埋没し、発見された人骨の埋葬供養を行なう。作業終了後古墳現場にて簡単な懇親会。発掘器材を撤収し、調査の全日程を終了する。

5月 14日（火） 晴 風強し 2名

復原作業第1日目。石室側壁の隙間の土を取除き、転落していた石を側壁上に積み上げる。

5月 15日（水） 雨 5名

雨模様であったが作業強行。河原より側壁用の大石を畚にて運ぶ。10時半雨激しくなり作業を中止する。午後教育長、係長、担当者の3名にて周囲の用地買収について土地所有者を訪問する。

5月 16日（木） 晴 4名

石室の石積みをほぼ完了し、側壁の隙間にコンクリートをつめる。古墳保存に必要な周囲の用地を測り、午後、再度教育長他2名にて土地所有者を訪い、用地買収について協力を要請する。

5月 17日（金） 晴 5名

石室の復原作業を終了する。コンクリートの固まるまで作業を中止とする。

教育長他2名にて土地所有者宅を訪い、用地買収についてほぼ諒解を得ることができた。午後、係長他3名にて、永明寺墓地公園に行き、石室の蓋石を選定する。

5月 20日（月）

午前9時より市長室にて市長立合いのもとに、土地所有者と用地買収について話し合いを行ない、合意に達する。直ちに現場に起き境界の杭打ちをする。

5月 21日（火） 曇

蓋石を墓地公園より運搬のため、譲渡クレーンが現場視察。

- 5月23日(水) 晴 2名  
古墳周囲の境界に使用する河原石の運搬。種々の都合により業者ターンによる蓋石の運搬を中止する。
- 5月24日(金) 曇一時風雨強し 3名  
水田との境界に河原石を並べる。発掘の際に剥がした墳丘の封土を元に戻す。蓋石の見通しがつくまで作業を中止とする。
- 6月17日(月)  
石室の上に鉄骨を渡して蓋石を載せることとして作業再開。北原鉄骨店が現場を視察の上、H鋼でなければ長持ちしないとのことでH鋼を渡す。
- 6月21日(金) 曇、午後雨 7名  
古墳に残っていた蓋石を石室に載せる作業、北原石材店に依頼してチェーンブロックを使用する。コンクリートにて蓋石を固定する。
- 6月22日(土) 晴 番号激し 3名  
上川より河原石を運搬し、道路際の石積み作業。
- 6月25日(火) 晴 4名  
石室の入口部に載せる蓋石を探す。幸に矢穴古墳に使用したと思われる花崗岩があり、地元の塚原区長に譲渡の交渉をする。終日墳丘の土盛り作業。
- 6月27日(木) 曇 4名  
建設課のダンプカーを借り、岩波主事の運転により蓋石の隙間にのせる花崗岩を永明寺墓地公園より運搬する。
- 6月29日(土) 晴 5名  
終日墳丘の土盛り作業。
- 7月4日(木) 晴 5名  
雨のために中止していた作業を再開。塚原区より蓋石の花崗岩を譲り受けることができ、運搬し、チェーンブロックにより石室の入口に載せる。
- 7月6日(土) 4名  
墳丘の土盛り作業。夕刻激しい雨で全身ずぶ濡れとなる。
- 7月8日(月) 晴、むし暑く汗流の如し。 4名  
終日古墳の土盛り作業。一輪車による作業のため、墳丘頂部までの土盛りに苦労する。
- 7月9日(火) 晴 番号 4名  
上川の河原芝を剥ぎ、墳丘の芝張り作業
- 7月10日(水) 晴 午後一時前 3名  
芝張りを終了し、古墳石室内外の清掃。困難を極めた古墳復原作業をようやく完了する。午後跡片付け。雨の中を教育長、次長、係長視察。

なお、工経塚の発掘調査および復原保存は、茅野市教育委員会の昭和49年度文化財保護事業の一環として行なわれたわけであるが、調査委員会の役員構成は下記のとおりである。(宮坂虎次)

委員長	木川千 年	茅野市教育長
副委員長	小平 実人	茅野市文化財審議委員長
委 員	斎藤 忠	大正大学教授
	花岡 健雄	茅野市教育委員長
	石田 熊	茅野市もの本町区長
	今井 すみえ	茅野市文化財審議委員
	小川 由加里	"
	宮沢 伝	"
	茅野 虎次	"

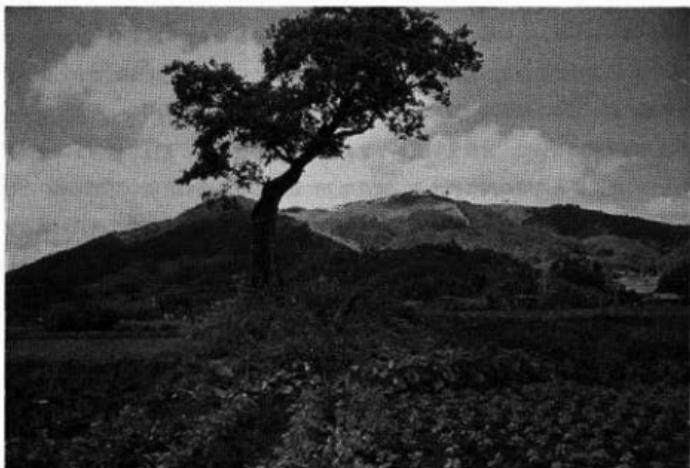
調査団長	斎藤 忠	大正大学教授
調査主任	宮坂 光昭	諏訪考古学研究所
調査員	河西 清光	岡谷東高等学校教諭
"	宮坂 虎次	尖石考古館主事

事務局	教育長	木川千 年
	教育次長	小島日 吉
	社会教育係長	矢崎久 治
	社会教育係	岩波吉 春 長田 篤
		戸田外 史 福田洋 子
		宮坂 虎次

## おわりに

斎藤忠

昭和31年6月に、私は正經塚古墳を訪れたことがある。墳丘上に天井石とみなされる石材の一部も露呈しており、かなり荒廃していたが、1本の老樹が印象的であった（第10図）。その後、この樹



第10図 昭和31年の正經塚

木も朽ち、墳丘の周囲も次第に削平され、ますます荒廃してしまった。しかも、新たにその傍に道路を開設することになり、このまま放棄すれば恐らく煙滅の危機に瀕することも憂慮された。茅野市において、この古墳の保存顕彰に積極的にのりだし、調査の上、復旧し、後世に伝えることを決定したことは、文化財保存の趣旨からみて、まことに適切なものといってよい。この間、茅野市木川千年教育長の努力があり、また宮坂英式氏をはじめ文化財関係の方々の配慮があったのであり、ことに宮坂氏が、令息虎次氏とともにわざわざ拙宅を訪られられて、調査に関する協力を申しでられたことは、感激の至りであった。

このような経過のもとに調査が行なわれ、幸いに宮坂光昭氏が、私と力をあわせて調査の衝にあたることになり、また、市教育委員会の立場から、宮坂虎次氏が終始参加することになったのであった。

私は、この古墳の調査にあたって、まず墳丘の実測を、大矢昌彦・黒沢彰哉両君の協力のもとに行なったのであったが、特に現在の周囲の部分にある石材の並列に注意をはらった。もしこれが、当初からの位置と反し、当初の周囲とすれば、いわゆる外護列石の新しい事例になるからである。しかし、その後、調査の進行にともない、当時の周囲は、より外がわに拡がっており、後世耕作地との界のために石室の石材の一部が利用されたものであることがわかった。

古墳が横穴式石室をそなえたものであり、この石室は、ことに一種の片袖式ともいべきもので、この地方では比較的少いものであることもわかったが、特に、今回の成果の一つに、側壁の裏でその構造の一端がわかり、この種の石室の構築技法が明かにされた点がある。従来、横穴式石室の調査の場合には、内部の構造のみが対象になり、壁面の裏がわの顯現はおろそかにされた観がある。この点、王経塚においては、重要な一資料を提供したものであろう。

この古墳の年代観について、宮坂光昭氏が7世紀後半となしていることは、穏当とみなされる。7世紀後半というと、終末古墳の例に属する。諫訪地方におけるこの墳の古墳の問題については、早く藤森栄一氏の労作『信濃諫訪地方古墳の地域的研究』があり、また桐原健氏の「諫訪盆地古墳群にみられる一姿相」が（信濃16—10）や宮坂光昭氏の「地方における古墳時代末期墓制の展開」（信濃25—4）等があるが、この地方における7世紀後半から8世紀の古墳集団の諸問題はたしかに考古学上或いは古代史上に多くの課題が含まれている。宮坂光昭氏によると、諫訪地方といつても、特に茅野市周辺に密集しており、これらもさらに3群にわけられ、その1群の永明寺山麓古墳群は既に7世紀前半から展開していたものであるが、この茅野市周辺地域に、7世紀後半から8世紀において、一つの顕著な終末古墳文化が発達していたことは明らかである。これらの古墳集団の被葬者について、宮坂光昭氏の考えのように馬匹的性格をもったもの或いは武人的性格または帰化人の性格の要素などいろいろな問題も考えられるであろうし、またこの地域が、八ヶ岳の山麓にあたる交通上の枢要な地域に当ることも、被葬者の性格を考える上の重要な要素になるであろう。私が、特に、これらの古墳集団において問題にしたいのは、中央との関係である。7世紀後半というと、既に政府によって、大化の喪葬制が発布された直後であり、そこには墓制に対するこまかい規定が設けられている。この規定が、果たして、どの程度に実際に履行されたかを新たに検討しなければならない。王経塚、或いは既に調査されたこの地方の古墳の内部構造をみると、この地域においては、この規定は忠実に行なわれず、単なる先行の墓制の伝統を展開させたに過ぎないとと思っている。これは、この地域のみでなく、

全国的に、各地のこの頃の古墳においても同じことがいえる場合が多い。私は、これらの事実に即して、この大化の変葬例をあらためて検討しなければならないと思っている。この点、王経塚は一つの資料を提供したものであった。

さらに、私が、王経塚に寄せている学問的な関心の一つは、石室内から、平安時代とみなされる遺物の発見されていることであり、これは、他の副葬品との照合の上から見ても明かに時代を別にしたものである。この際考えられることは、追葬とみなされる点である。無論追葬といっても、同一世系のものが、これを祖先の墓として伝え、そこに新たに葬った場合と、全く無縁の人が、たまたまこの石室を利用した場合とがあり、必ずしも前者とのみは見られない。しかし、追葬のほかに、平安時代に、この石室が開口されており、信仰の対象となり、そこに奉賽されたものともみられぬことはない。各地の横穴には、むしろこの種のものが多いようである。築造年時からへだたった遺物が包含されている横穴式石室や横穴の場合、このような研究にも、新たな日を開くべきと思っている。王経塚は、その一つの資料を提供したものである。

王経塚或いはその周辺に散在する古墳集団、ことに、これらの3群における被葬者群の方位地や、その経済的構成や相互の関係など、なお問題にすべきものが多い。この古墳の調査が一つの契機となり、これらについて今後、地元の研究者の意欲的な業績の数多くあらわれることを期待したい。



古墳とその周辺（東海高校屋上よりのぞむ）



古墳とその周辺（永明寺山中腹よりのぞむ）

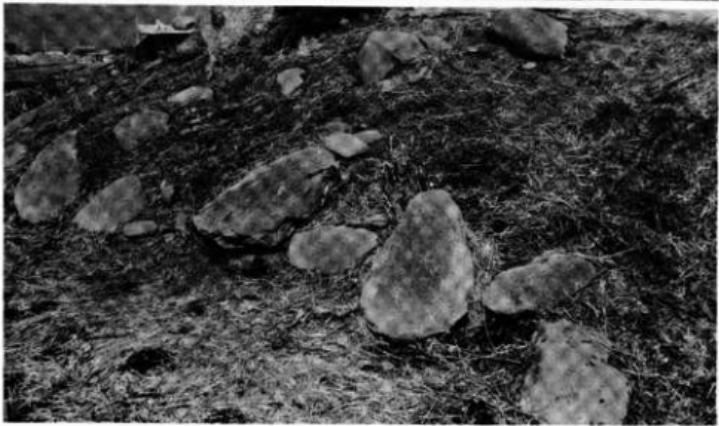
墳丘（東南より）



墳丘上部



墳丘の裾（南がわ）

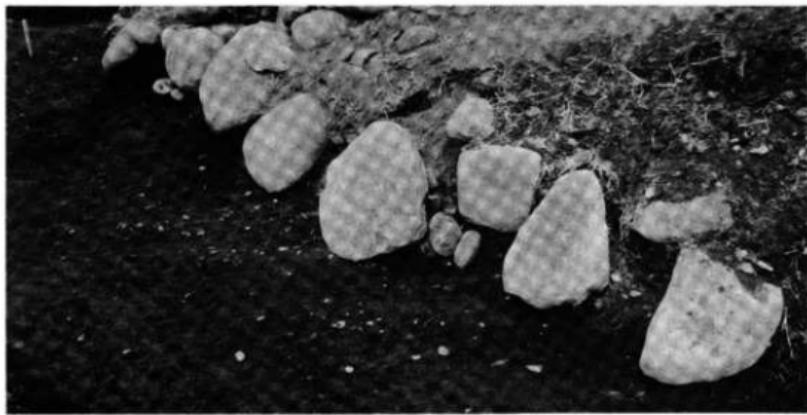




天井石の露呈状況

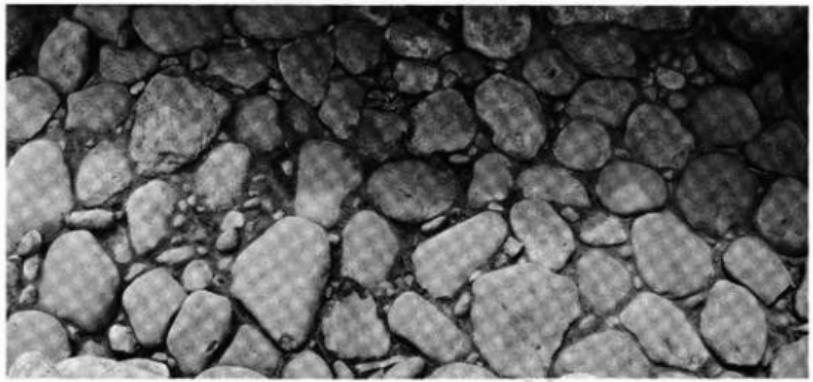


上 天井部南東がわの側壁上端部  
下 墳丘南がわの石材（外護列石でなく  
のちにならべたことがわかった）



上 溝掃後の石室全貌 北がわより  
下 奥壁

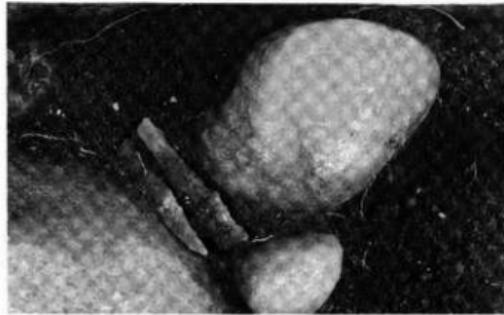
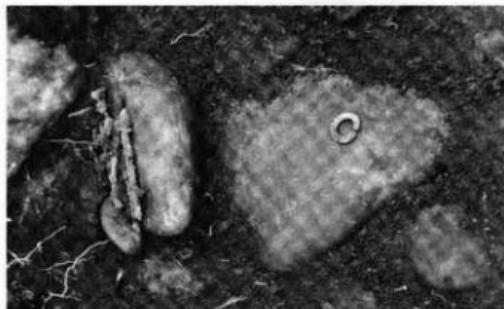
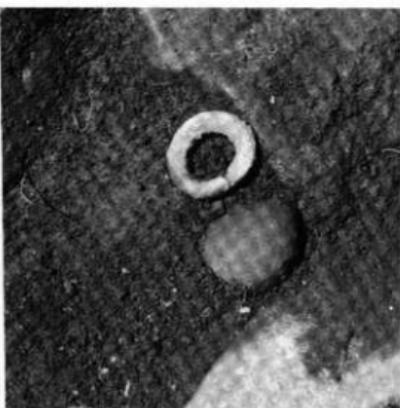




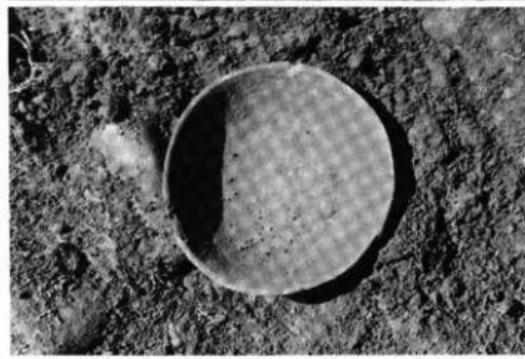
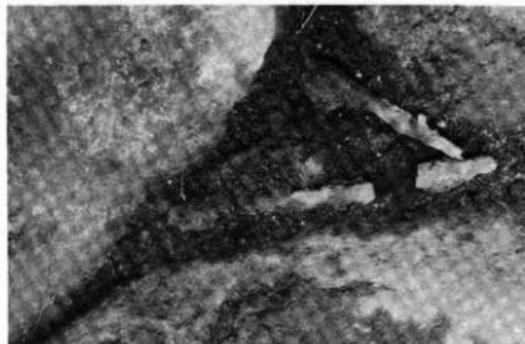
上 西がわ側壁一部

下 床部の状態

遺物出土状態  
上 金環 中 金鐶と鉄鏹  
下 刀子

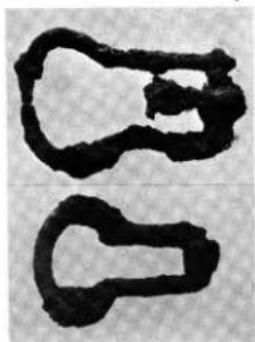


上 銛具 中 遺物出土狀態  
遺物出土狀態  
中 鐵鎌 下 土師器(皿)

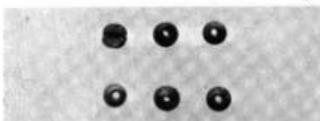


出土  
遺物

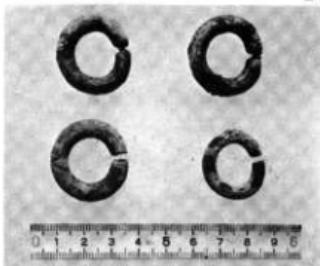
4



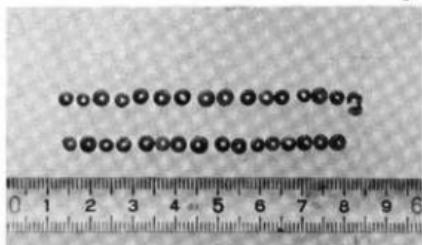
1



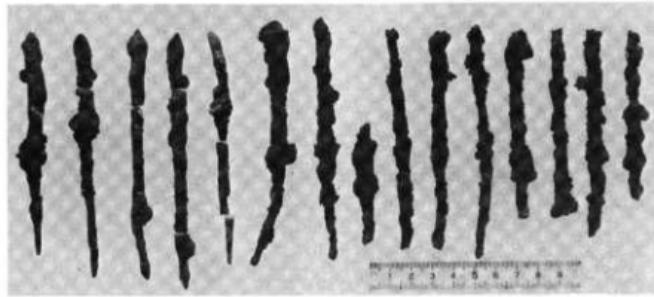
2



3



5



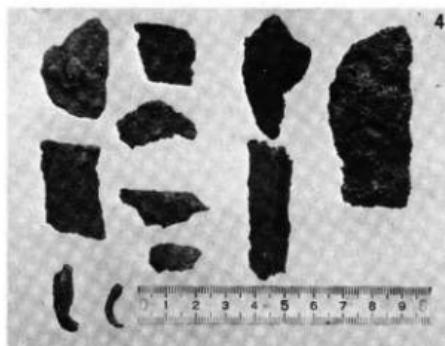
1. 丸玉

2. 金環

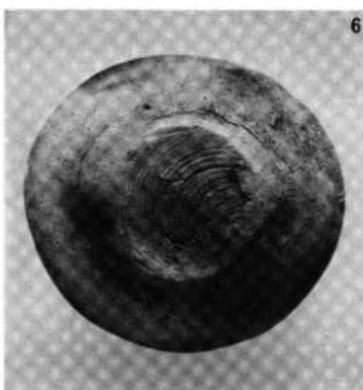
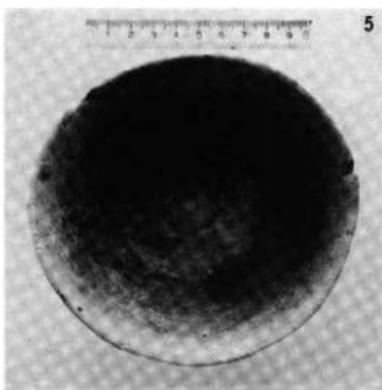
3. ガラス小玉

4. 紋具

5. 鉄鎌



6 5 4 3 2 1  
刀銷具 刀銷 不明鐵器 直刀用鞘金具  
不明鐵器片 土師器(皿)



完成後の古墳



復原清掃した石室  
同一部



同一部



---

## 王 経 塚

昭和50年3月20日 印 刷

昭和50年3月25日 発 行

(非 売 品)

長野県茅野市もの4104番地  
発行所 茅野市教育委員会

長野県岡谷市川岸108番地  
印刷所 中央印刷株式会社

---

